



TITLE:

<Book Review>Ethel Nurge, Life in a Leyte Village, American Ethnological Society, Monograph No. 40; Seattle : University of Washington Press, 1965,ix+157p

AUTHOR(S):

前田, 成文

---

CITATION:

前田, 成文. <Book Review>Ethel Nurge, Life in a Leyte Village, American Ethnological Society, Monograph No. 40; Seattle : University of Washington Press, 1965,ix+157p. 東南アジア研究 1967, 4(5): 1030-1030

ISSUE DATE:

1967-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55338>

RIGHT:

いかにあるべきか、いわゆる当為 (Sollen) が本書を通じ、あらゆる問題について強調されている。したがって、本書は農業開発の存在 (Sein) については、模範事例がしばしば引用されているが、それ以上の分析は行なわれていない。

東南アジア農業開発については、フィリピン・インドネシアの事例が、ところどころで、挙げられる。もちろん、本書は低開発国を通じての、農業開発のありかたを論ずるのだから、東南アジア農業開発そのものに直接触れていない。しかし、本書から教えられるところは多い。(もちろん、東南アジアの実態にそぐわないところも、かなり見られる。)

東南アジア農業開発を考えるにあたっての、ひとつの興味ある文献であるといえよう。もちろん、本書は、それが本来目的としているように、実際の農業開発にたずさわっている低開発国の指導者に広く読まれることが望ましい。(本岡 武)

Ethel Nurge. *Life in a Leyte Village*. American Ethnological Society, Monograph No. 40; Seattle: University of Washington Press, 1965. ix+157 p.

フィリピンの人類学的な調査は、戦後、Fred Eggan を中心に精密に行なわれているが、本書の著者 Ethel Nurge も彼の弟子の一人である。彼女は、Visayan 諸島に関して体系的な人類学の調査がないのに目をつけて、調査地として Leyte 島を選び、その島の東北に位置する農漁村 (231 家族) に、1955 年 12 月から 1956 年 7 月まで定着して調査を行なった。その主な関心は、Child Rearing にともなう社会化の問題である。

本書の内容は、6 章に分けられている。第 1 章は、調査に入る前に人類学者が直面していく選択・決定をいかに行なったかという説明で、調査の内幕をうかがえる。第 2 章は、調査地に関する一般的な説明で、地理的・歴史的・政治的な背景および衣服と家の構造についての叙述である。

第 3 章以下は、著者が行なったインタビューによるデータを基礎にしている。第 3 章の社会経済構造は、231 家族についての土地所有、土地利用、職業構成、現金収入、土地所有と職業との相関、土地所有と現金

収入、職業と収入、などが説明され、各々に簡単な表が附されている。これらのデータをもとにして、総括として、社会成層化について論じられている。

第 4 章の世帯構成では、129 世帯のデータが、上記とは異なる調査票によって集計されている。彼女の家族類型で注意されるのは、再建核家族 (re-established nuclear family) を一つのタイプとして分けていることと、核家族以外の親族を、水平的 (horizontal) と垂直的 (vertical) とに分けていることである。具体的には、(1) intact nuclear, (2) truncated nuclear, (3) re-established nuclear, (4) extended horizontal, (5) extended vertical, (6) skipped generation extended vertical, (7) truncated or residual, (8) idiosyncratic にわけられ、それぞれに分類される世帯を考察している。タイプによって適当な表が附されている。前章同様、最後には、家族・世帯に関する理論的な問題が出されているが、彼女のデータによって確定的な解答は与えられていない。

第 5 章は、養育に関する調査であるが、この調査と前章とをつなぐような形で、親族名称が簡単に触れている。母子関係に関するインタビューは、John W.M. Whiting などの作製した調査票を若干変更しただけのものを使い、分析の枠組も Whiting 等に依っている。インタビューの対象は、経済的レベルによって選ばれた家族の 3~10 才までの 6 人ずつの男子・女子について行なわれている。第 6 章は母子関係を拡大して、妻-夫、娘-父、娘-母、姉-妹、姉妹-兄弟の間の関係が取り扱われている。インタビューの調査票は、現地で種々の検討を経て、母子関係を補う形で作られている。インタビューの対象は、12 人の母親と、12 人の男性で、彼らの実際の (上記の親族に対する) 対人関係が、この調査票によって得られている。母子関係・家族内の対人関係は、フォーマルなインタビューによって、データが規格的に集められてはいるが、このデータは、言い換えれば、規範的に対親族行動の一部と言える。

本書の特色は、社会化の問題を広い視野から見ようとしていることと、情報源、調査の仕方、データの処理法を非常に詳しく書いていること、などに見られる。ただ第 4 章以下のデータは、すべて抽出標本によるものであるが、サンプリングに関するプロセスにはあまり触れられていない。(前田 成文)